

西尾（川島）秀子さんの松江美術工芸研究所資料

（1）松江美術工芸研究所とは

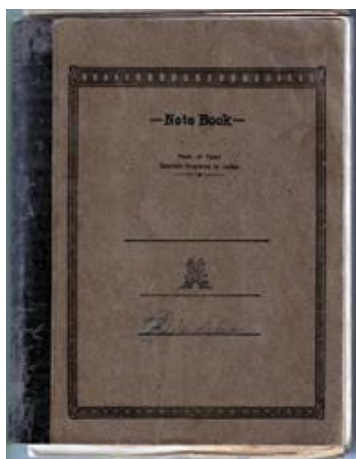
「松江美術工芸研究所」は、昭和21～23年（1946～1948）にかけて2年間だけ開校された私立学校です。当時、公職追放にあって表舞台から退いていた田部長右衛門12代朋之氏（後に島根県知事）が私財を投じて設立しました。河井寛次郎、平塚運一など、松江に疎開していた郷土出身の著名作家が講師を務めたことがよく知られています。平成15年（2003）5月に「知られざる松江美術工芸研究所の世界」展（島根県文化振興財団ほか主催、島根県立美術館ギャラリー）が大規模に開催されたので、ご記憶の方も多いでしょう。この展覧会を主導した平本映子さんは、『湖都松江』9号（平成17年3月刊）にも、「松江美術工芸研究所へようこそ～松江文化の基礎を築いた幻の芸術学校～」という詳しい紹介文を書かれています。

（2）『松江市史』での資料調査

『松江市史』では、通史編5「近現代」の第三章第三節第四項「地域文化運動の高揚」（執筆担当：鬼嶋淳先生）の中で、この研究所をとりあげました。事務局で関連資料を集める過程で、平本さんが書かれた文章の中に、「神戸から疎開していた西尾秀子さん（旧姓川島）が宝物にしている一冊の大学ノート」、すなわち「研究所の講義録」が紹介されているのが眼に止まりました。早速、平本さんに連絡を取り、「このノートは今どうなっていますか？」と伺うと、「撮影後、秀子さんに返却した。息子さんは、松江歴史館の事務局支配人をしている西尾俊也さんだから、直接聞いてみては」とのお返事でした。そこで西尾さんにお電話してみると、秀子さんは平成29年（2017）に満100歳で亡くなられていました。しかし、資料はどこかにあるはずだから探して下さるとのこと。ご多忙の中、数ヶ月かけて探し出していただきました。

史料編纂課（当時）にお持ちいただいた資料を見て驚きました。「漆器類」と書かれた大きな箱に、件の研究所講義筆記【写真 1】のほか、入学式の写真【写真 2】、人物クロッキーやデザイン案などの実技作品、当時の新聞記事、平成 15 年の展覧会の広報物まで、とても丁寧に整理保存されていました。

改めて伺うと、秀子さんは松江出身ではなく、もともと神戸に住んでいたそうです。相愛女子大学を卒業後、戦時中に親戚のいる松江に疎開し、たまたま開校された研究所に入学されたとのことでした。入学時は 29 歳前後だったそうです。



【写真 1】左：松江美術工芸研究所の講義筆記ノート（資料番号 2）

【写真 2】中：松江美術工芸研究所入学式記念写真（資料番号 10-3-1）、左：同部分、川島秀子さん

（3）西尾（川島）秀子さんの松江美術工芸研究所資料

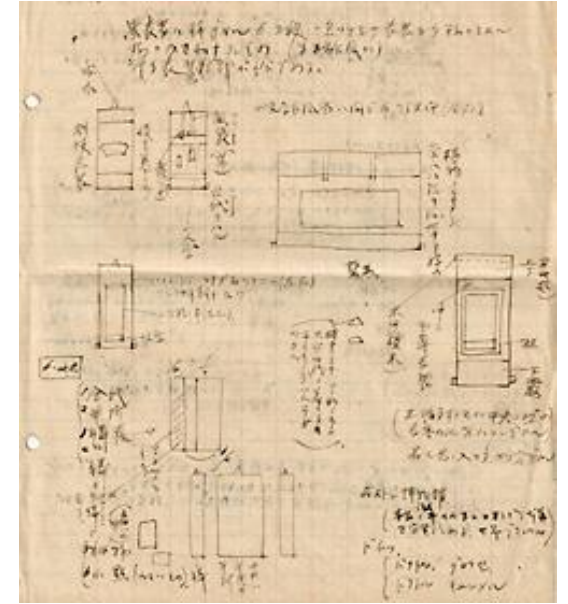
資料一式をお預かりして調査するうち、さらに驚きました。講義ノートには当時のプリント類も挟み込まれ、授業内容が手に取るように分かるばかりでなく、講師たちの似顔絵まで描かれていました。「辻先生」とあるのは鳥取県日野郡出身の彫刻家・辻晋堂【写真 3】、「一氏講演」とあるのは東出雲町揖屋出身の美術評論家・一氏義良でしょう（「輸出工芸研究家」「北京に在住」「熱演なり」とあり）【写真 4】。



【写真 3】講義筆記ノート（資料番号 2）より「辻先生」



【写真 4】スケッチブック（資料番号 1）より「一氏講演」



【写真 5】講義筆記ノート（資料番号 2）より「桑原氏講義」

肉筆浮世絵コレクターで刀装具研究者としても著名な桑原羊次郎の講義筆記には、掛軸の表具、茶入の種類などが図入で非常に詳しく記されており【写真 5】、ガリ版刷のプリント「本朝画家流派之概説／桑原雙蛙編」（全 5 枚！）もありました。調べると桑原は昭和 21 年当時 78 歳。キャリアも終盤にさしかかった大御所だったはずですが、若い生徒相手に全く手は抜かなかったようです。その他の講師陣の講義内容も、図法（錦織保久）、色彩学（松上茂）、窯業（松原隆男）、塗料・漆芸（小島理吉郎）、版画史（平塚運一？）など、どれもかなり専門的な内容です。現代で言えば、美術大学の修士課程レベルでしょうか。

一方、微笑ましく感じたのは実技作品です。辻晋堂が指導した人物クロッキーは、どうやら生徒同士が交代でモデルになった様子で、上半身裸にさせられた男子が恥ずかしそうにポーズをとっています（女子は着衣）【写真 6】。物資が不足していたため、それが描かれているのはポスターの裏紙。同研究所は、実は県下初の「男女共学制」だったという点でも有名ですが、思わず「焼け跡の青春だねえ」と呟いてしまいました。



【写真 6】人物クロッキー（資料番号 5）より

（4）金津滋の《小泉八雲肖像》

資料の中に、思わぬものがありました。小泉八雲の肖像で、どう見ても工芸作家・茶人として著名な金津滋の作品です【写真 7】。国画会奨励賞を受賞した型染作品集《小泉八雲旧居》（昭和 24 年制作）がよく知られていますが、その中にある八雲の横顔【写真 8】と非常によく似ています。しかし、サイズも違えば図の配置も異なっている（頭部が円に接していない）。摺りも何だかちょっと汚れている。少し考えてみましたが、これはおそらく金津が研究所在籍中に制作した試作品で、仕上がりがいまいちで捨てようとしたものを、同級生の秀子さんが惜しんで頂戴したのではないのでしょうか。



【写真 7】金津滋《小泉八雲肖像》型染（資料番号 6-1）



【写真 8】左：桑原羊次郎著『松江に於ける八雲の私生活』（昭和 25 年刊）表紙

右：金津滋の型染作品集《小泉八雲旧居》（昭和 24 年制作）、ともに松江市立中央図書館蔵

ちなみに、前述の桑原羊次郎は昭和 25 年（1950）のハーン没後 100 年に『松江に於ける八雲の私生活』（島根新聞社刊）を出版していますが、その表紙にも、金津滋の制作による別の《小泉八雲肖像》（前髪が多くて若々しい）があしらわれています【写真 8】。研究所での教え子が大きな賞を射止めたのが嬉しくて、早速、自著の装幀に起用したのではないかと想像しています。

（5）女性運動家として

資料の中に、黄ばんだ「島根新聞」昭和 21 年（1946）4 月 4 日紙面【写真 9】が保存されていました。「アメリカの婦選／家庭を壊さぬ主張で夫婦仲よく投票」という記事が赤鉛筆で囲まれ、当時、島根県に駐留していた GHQ の松江軍政部長オスボン少佐と、着物姿の秀子さんが笑顔で対談しています。それまで日本で認められていなかった女性の参政権が前年 12 月の選挙法改正で認められ、この年の参院選で初めて投票権が行使されることになったのです。



【写真9】「島根新聞」昭和21年（1946）4月4日記事

対談当日の質問内容をまとめた自筆の覚書も残されていましたが、冒頭に「この度はマッカーサー司令部より婦人にも参政権をお許し下さり婦人としてよろこび…チュウ心〔衷心〕より御礼申し上げる次第でございます」とあります。恥ずかしながら、日本における女性参政権の道が敗戦によって開かれたことを知らずにいた私は、眩しいような思いがしました。

他にも、「新しき恋愛と結婚」と題する座談会記事（「島根新聞」昭和21年7月3日）が残されており、秀子さんも参加していました。肩書は「卸し商経営」とあります。経済的に自立し、政治にも関心の高い、新しき女性だったことでしょう。そうした女性だったからこそ、あれだけ詳細かつ冷静に研究所の講義内容を記録することができたのだと納得しました。

（6）松江市への寄贈

令和2年（2020）3月に『松江市史』の編纂事業が無事に終了し、その後、目録作成と撮影も終えたので、松江美術工芸研究所資料はご所蔵者に返却することになりました。名残惜しいような気持ちでしたが、「そんなに大事なものなら」とのご厚意で、松江市に一式寄贈いただくことに。同年9月に受贈の手続きを終え、資料は松江市の所蔵となりました。

著名な男性講師陣に注目が集まりがちな松江美術工芸研究所ですが、この資料は、実際に行われていた講義の内容を伝えるばかりでなく、無名だけれど強い意志を持った女性がそこに確かに存在し、希望を持って美術を学んでいたこと、暗く貧しいイメージの敗戦が、一面で女性参政権実現の大きなきっかけであり、恩恵を喜ぶ女性がいたことなど、新たな気づきを与えてくれました。

（松江市史料調査課・歴史史料専門調査員／村角紀子／令和２年１０月１日記）